

小径

遠山 ようこ

行徳の海にむかつて
歩いてゆく小径の中ほどに
小さな自転車屋さんがある

店先にはいつも野球帽をかぶった
おじいさんが座っている
おじいさんの横の

止まり木には

頬だけが赤い白いオウムが一羽
何回通っても

絵本に出てきそうな光景だ

たとえば物語は
こんなふうにはじまる

「めったに客の来ない午前中は
こうしてコイツと店番

店先を掃除して自転車を並べると
朝の仕事はおしまいさ

あとはコイツとおしゃべり

コイツは気だてのいいヤツで

オレの話をだまっけてきいてくれる

オレもコイツの話をきいてやるのさ

コイツは南の島で生まれた

頭の中はコバルトブルーの

空と海でいっぱいなのさ

コイツが夢の中で仲間と会っているのを
オレは知ってる

なぜわかるかって？

コイツの羽が海の色に変わるからさ」

ページをめくると

自転車屋さんの前を

ゆっくり通りすぎる私がいる

おじいさんとオウムと私の

短い物語である

駅にも商店街にも抜けていない

この小径をよく歩く

春には生まれ出た木の芽が

握手をねだり

夏にはキアゲハが舞い

ヒルガオが垣根にツルを巻く

秋には落ち葉とないしょの話

冬は風の形になって

ひたすら歩く

好んでこの小径を歩くのは

歩いていると心が

満ち足りてくるからだ

それはおじいさんとオウムの

せいかもしれないし

小径の四季とのふれあいの

せいかもしれない